

英語を通じて専門をひらく

大学英語教育における動機づけの再構築

那須雅子（岡山大学）

1. はじめに

本発表では、大学英語教育における動機づけを、個人の特性としてではなく、専門領域や社会との関係の中で再構築される現象として捉える。日本の大学生にとって英語は、大学入学までは受験や進学と密接に結びついた学習対象である。しかし入学後には、受験という明確な目標が失われる一方で、大学生活への適応、専門分野への関心の移行、日常的な英語使用機会の乏しさなどにより、英語を学ぶ理由が見えにくくなる。その結果、大学入学後に英語力や学習意欲が低下する「ダウンヒル現象」が報告されており、英語学習の意味や目的をいかに再構築するかが重要な課題となっている。

ただし、この現象を単に学生の努力不足や意欲低下として説明することは十分ではない。むしろ問われるべきなのは、学生が英語学習にどのような意味を見だし、またその意味づけが大学での学びの過程においてどのように変化するのであろう。本発表は、大学生の英語学習への動機づけを、「やる気がある／ない」という単純な二分法で捉えるのではなく、専門領域、将来のキャリア、社会との関わりの中で変化し、再構築される動的なプロセスとして検討する。

2. 調査の背景と分析の視点

本研究では、全学部約 2300 名の日本人大学生を対象としたアンケート調査をもとに、英語学習に対する態度の多様性と傾向を分析した。その結果、大学 1 年生の段階では、英語力を伸ばしたい、英語でコミュニケーションしたいという希望をもつ学生が少なくない一方、授業外で英語を使う機会はきわめて限られていることが明らかになった。

さらに、1 年生と 3 年生の回答を比較すると、英語学習を「努力したい」と考える学生の割合は低下し、「今は忙しくてできない」と考える学生の割合が増加する傾向が見られた。文学系・工学系の学生を比較した場合にも、程度の差はあるものの、英語学習に対する積極性は学年進行とともに弱まる傾向を示している。この背景には、大学において専門科目の学習や課外活動、就職準備などが本格化し、学生の関心や時間的資源が分散することがあると考えられる。加えて、日本の大学生の多くは、授業外で英語を使用する機会をほとんど持たない。そのため、受験という明確な目標を終えた後、英語を学び続ける必然性が失われやすく、英語学習の優先順位は、専門の学びや日常生活の中で次第に低下していく。

この分析は、発表者がこれまで蓄積してきたナラティブ研究の知見（Nasu 2025）を基盤とし、学生が英語学習に見いだす意味の多様性を数量的に裏づけるものである。ナラティブ研究では、学習者の語りを通して、経験の時間的な連なりや意味づけの変化を捉える。アンケート調査は、そのような個別の語りだけでは見えにくい全体的傾向を示すものであり、両者を往還することによって、大学英語教育における動機づけの再構築をより立体的に捉えることができる。

3. 英語学習に対する態度の変容

以上の視点から、本発表では、日本人大学生の英語学習に対する態度を、固定的な分類ではなく、経験や環境に応じて変化しうるものとして捉える。大きくは、英語を自分の学びや将来のために積極的に活用しようとする「アクティブ活用型」と、英語の必要性を感じにくくなり、学習から後退していく「パッシブ後退型」という二つのタイプに整理できる。

アクティブ活用型には、専門分野への関心が先行する「専門志向型」、英語力向上そのものに価値を見いだす「成長発見型」、就職や資格取得を見据える「キャリア準備型」が含まれる。これに対して、パッシブ後退型には、重要性は認識しているが行動に移せない「先送り型」、英語の必要性を十分に感じていない「意識欠如型」、英語への苦手意識や否定的感情が強い「ネガティブ型」が含まれる。重要なのは、これらの類型が学生を固定的にラベルづけるものではないという点である。学生は、大学生活の経験、専門教育との出会い、将来像の変化を通して、一つの類型から別の類型へと移行しうる。

4. 専門との接続による再構築

この移行を示す事例として、理系学生 A への半構造化インタビューを取り上げた。A は大学入学当初、将来の明確な目標があったというよりも、「大学でも何かを頑張りたい」という思いから英語学習に取り組んでいた。この段階では、英語学習は自己成長のための対象として意味づけられていた。

しかし、専門教育が進むにつれて、A は気象学への関心を深め、英語論文や国際的な研究動向に触れる必要性を認識するようになった。ここで英語は、単なる一般教育科目や資格のための学習対象ではなく、専門の最先端にアクセスするための研究ツールへと意味を変えていく。A の学習経験は「成長発見型」から「専門志向型」へと移行するプロセスとして理解できる。

この事例が示すのは、英語学習の動機が最初から専門と結びついているとは限らないということである。むしろ

る、大学生活の中での経験や専門領域への関心の深まりを通して、英語学習の意味は後からつながり、再構築されていく。日常生活の中で英語を必要とする場面が限られている日本の大学生にとって、英語学習を継続するためには、英語を大学での学びや将来像と結びつけて捉えられることが重要である。その接続が見えないままでは、英語学習を継続することは容易ではない。

5. 教育改革への示唆

大学英語教育は、全学共通教育として実施される低年次の英語科目を中心に考えられがちである。しかし、専門教育が本格化する 3・4 年次にも英語学習を継続的に位置づけ、学生が英語学習と専門領域、将来のキャリア、さらには自らの生き方と結びつけて考える機会を設計することが必要であろう。

そのためには、英語系教員だけで完結する英語教育ではなく、学部教員と連携しながら、英語教育と専門教育を接続する体制を整えることが求められる。筆者の勤務校では、高年次英語科目の設置、英語で学ぶ専門科目の導入、学部教員との連携などを通して、低年次の英語教育と専門教育を接続する取り組みを進めている。ここで必要なのは、単に英語科目を増やすことではない。学生が自分の専門や将来を考える中で、英語学習をどのように位置づけられるかを考える機会を設計することである。

このような学内組織の横断的連携を基盤とした英語教育改革は、英語を単なる必修科目としてではなく、専門の学びを深め、社会との接点を広げるための媒介として再定義する試みである。英語学習と専門をつなぐことを通じて、学生は自らの学びをひらき、将来のキャリアや生き方を国際的な視野の中で描きなおすことができる。

6. おわりに

本発表は、大学英語教育における動機づけを、個人の内面に閉じた心理的特性としてではなく、専門領域や社会との関係の中で変化し、再構築される現象として捉え直した。大学入学後、受験によって支えられていた英語学習の目的は揺らぎやすい。しかし、専門教育や将来像との出会いを通して、英語学習の意味づけは学生の中で少しずつ結び直され、新たな方向性をもちはじめると。今後の大学英語教育では、低年次の英語教育と高年次の専門教育との接続を、個々の教員の工夫に依存するのではなく、教育設計の中心的課題として位置づけていくことが求められるのではないかと。入学から卒業までの学士課程を通じて、英語学習に対する動機づけの変化プロセスを支えることは、学生が専門の学びを深め、将来のキャリアや自らの生き方をひらいていくうえで重要である。

註

本研究は JSPS 科研費 JP24K04106 の助成を受けたものである。

引用文献

Dörnyei, Zoltán. *The Psychology of the Language Learner: Individual Differences in Second Language Acquisition*. Routledge, 2005.

Dörnyei, Zoltán. *Innovations and Challenges in Language Learning Motivation*. Routledge, 2019.

Nasu, Masako. “A Narrative Approach to the Life Stories of Foreign Language Learners: Modelling External and Internal Factors of Successful Learning Experience.” *Weaving Stories of Language Education with Narratives of Teachers and Learners*, edited by Nami Sakamoto, Masako Nasu, Kazutake Kita, and Masayuki Teranishi, Palgrave Macmillan, 2025, pp. 157–82.

Norton, Bonny. *Identity and Language Learning: Extending the Conversation*. Multilingual Matters, 2013.

Ushioda, Ema. “Language Learning Motivation, Self and Identity: Current Theoretical Perspectives.” *Computer Assisted Language Learning*, vol. 24, no. 3, 2011, pp. 199–210.

寺西雅子・荻野勝・大年順子. 「日本人大学生の英語学習に関する実態調査の報告—学習動機, 言語使用環境, 学習内容, 目標とする英語力, 海外体験—」. 『岡山大学教育推進機構教育研究紀要』 1, 2024, pp. 89–105.

八島智子. 『外国語学習とコミュニケーションの心理』. 関西大学出版部, 2019.